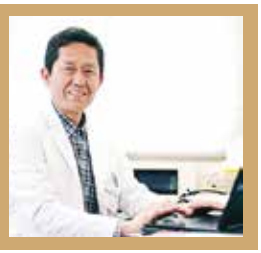
『メメント・モリ』

ひじり在宅クリニック　院長　岡本 拓也



同じ法人に所属する松山友彦医師が急逝した。

2023年11月14日、その日の朝、出勤途中の7時過ぎ頃ちょっとした自動車事故を起こしてしまった。ちょっとした、と書いたけれど、一歩間違えば大きな事故につながりかねない事故でもあったので、ちょっとした事故で済んだのは不幸中の幸いだった。警察官も現場に来てもらって状況報告等を済ませた後、クリニックに到着し、自分のやらかしてしまった事故のことをスタッフに話し終え、院長室に戻って間もなく、「えーーー！」という事務スタッフの大きな声が聞こえてきた。ただならぬことが起こったのであろうと十分に確信できる驚愕の大声。直ちに部屋を出て、「どうしたの？」と顔を出したところ、「松山先生が今朝突然亡くなったようです…」と、事務長。絶句した。絶句する、というのは、こういう時の状態を表すためにある言葉に違いない。「え…」と言ったきり、事務長の言葉が意味することを理解するのに少し時間を要した。

松山先生は前日までまったく普通に働いていたようで、本人も家族も職場の誰も彼もが、まさかこのような突然の別れが訪れようとは思ってもいなかった。その日の朝、突然に命が途切れたのだった。

事務長がぽつりと言った。「今日、お誕生日なんですよね…」。再び、一同、「えーーー！」電子カルテを開いて確認したら、確かにその日は松山先生の64歳の誕生日だった。

仕事柄、人生の終わりに立ち会うことは多い。今朝も、まだ寝ていた早朝に携帯が鳴り、急いで準備をして朝の5時過ぎに、自分よりも若い患者さんの死亡診断をしてきた。青森から来られた患者さんの両親も肩を落とし傍におられた。紹介を受けて、初めてご自宅を訪問したのが5日前であり、癌と診断されてからもまだ4か月しか経っていない若い患者さん。病気と闘い続けていく強い気持ちを持ちながら、薄れていく意識の中で、何を思っていただろう。傍らにいる両親や妻へのすまないという気持ちだったろうか…まだまだ父親を必要とする一人息子のことだったろうか…

2回目の訪問の際、患者さんがベッドに横たわっている部屋の壁に、額に入れて飾られている2枚の表彰状に気づいた。一人息子がもらってきた表彰状だった。「あれは誰が飾ったんですか。奥さんですか？」と尋ねると、隣にいた妻が先に口を開いて、「いえ、この人です」と夫を指した。「うん、まあ、少しでも励みになればと思って、ね…」と、少し照れ臭そうな風に父親の顔でそう言われた。「そうですか。嬉しかったんじゃないですかね。いいですね。お父さんのその気持ちは伝わったと思いますよ。」「さあ、どうですかねえ…そうだといいいですけどね…」そんな会話をしたのは、まだ3日前のこと。

いつか終わりが来ることは、誰もが頭ではわかっている。歳の順とは限らない。死に至る病いがある人が先とも限らない。それも頭ではわかっている。でも、本当に自分にその日が訪れることを普段は意識していないし、その日が来るとしてもだいぶん先のことのように思いながら生きている。

メメント・モリ…「自分がいつか必ず死ぬことを忘れるな」「死を想え」というラテン語の格言。私たちは、いつも、いつ訪れるかわからない死を背負って生きている。死は生の先の方に控えているものというよりも、生と死は一枚の紙の表裏の関係にあるのだろう。ひゅっと一陣の風が吹いて、「生」と書かれた紙が裏返るとそこには「死」がある…そんなことなのかもしれない。

冒頭にも書いたように、僕という紙切れも、一歩間違えば松山先生と同じ日に「死」の側に裏返っていたかもしれないわけで、もう少し先にあるもののように感じていた「死」は、実は、いつも僕の「生」の真横にあるものなのだと気づかされる。

ともあれ、その日、松山先生の突然の逝去の報告を耳にして、僕がやらかした些細な自動車事故で凹んでいた気分は雲散霧消した。いま生きていること、いま生かされているこの命、この貴い時間を、今日も精一杯使わせていただきます、と改めて思うのだった。